

■ 今月のメッセージ(2010年11月)

日本銀行富山事務所長
水上 誠一

先日、富山県内の教師の方々による金銭教育協議会が開催されました。そのテーマの中に「人・ものやお金を大切に作る心の育成」というフレーズがあり、これは大変大事なことだと感じました。

「人・ものやお金」と書くと柔らかい響きですが、すぐ頭に浮かんだのが、「ヒト・モノ・カネ」という言い回しです。そういえば、経済学の入門書には、「経済は、ヒト・モノ・カネの流れです。ヒト・モノ・カネは市場で取引されます。」というような冷たい文章が並んでいますよね。また、転職ブームのころは「今の会社では自分の市場価値が正当に評価されていない」という言い方もよく聞かれました。これも、自分を一個の商品とみなして、労働市場で取引されるときに付けられる価格を考え、それに比べて今の会社の給料が安すぎるということですね。今や、上海に日本の大学を卒業した若者が二万人いるとも言われる時代になり、昔なつかしい言い回しになってしまいました。

今ちょっとはやりのマルクス資本論ではありませんが、確かにこの世の中は、「ヒト・モノ・カネ」の需要と供給という冷徹な原理で成り立っています。例えば、ヒトやモノが必要以上の量になれば、供給を少なくするか、その価格を下げないとバランスが取れません。企業は、税制、為替、原材料費、人件費、立地、市場規模等様々な条件を眺め回し、最終的にはこれを数字に換算して、国内生産(または研究開発)か海外生産(または研究開発)かを決定しています。そうしなければ、あつという間に会社は消滅してしまうわけですから、責めることはできません。

しかし、皆さん、日本全国に、そして勿論この富山県にも、すごく難しい時代ながら、「人・ものやお金を大切に作る」会社がまだまだたくさんあります。同じ生産ラインで全く別の用途のものが作れないか、顧客のクレームの中に使い勝手の向上や新しい商品のアイデアがないかなど、知恵を振り絞って仕事を生み出しています。「雇用を作り、守るために新事業を始めた」と言い切る社長さんもいらっしゃいました。当然ながら、慈善事業として国内の雇用を守っているのではなく、まずは給与の引き下げで痛みを共有したうえ、これまでの蓄積とたゆまぬ研究(社員が入社後大学院で最先端技術を学習など)により、オンリーワンの製品を生み出したことで、先ほど申し上げた数字の計算で国内生産(または研究開発)がプラスとなって初めて可能になったことなのです。

ここで、「国内生産(または研究開発)」という言い方に注釈を付けますと、躍進するアジアの現状は、既に「賃金が安い」というだけでなく、日本の高度成長時代と全く同じように、「市場」として急拡大しているほか、生産効率は言うに及ばず、かなりの程度の設計開発力を備え始めており、「生産」が国内に残るかどうかのレベルではなく、「研究開発」でさえどこまで残すかの段階なのです。

ここで強調したいのは、このような厳しい現実の下でも、ヒトの独創性を生かし、オンリーワンのモノを作り、そのためにカネを生かしていく道は確実に存在するということです。ナンバーワンもとても大事ですが、ナンバーツーやスリーから常に追われる立場になるので、産官学金(融)の連携を強化し、しばらくは競争にさらされないオンリーワンを常に目指すべきだと思います。その底力は、外資が、日本の特許利用仲介に目を付けたことや、世界規模で日本品質の商品のネット販売を計画していることなどを見ても、まだまだ世界一、自信をもってよいのです。

こう考えてくると、これまで当初はコストにしか過ぎなかった新卒も、最初から資産として最大限活用される(=こき使われる?)、大切にされるということであり、その頑張りで市場価値(給料)が回復することにもなるのです。学生さん、期待される「実力」は大丈夫ですか! 頑張ってください!